

リンゴ並木

【子どもたちの活躍の影には、子どもたちを支える先生がいる。そして、子どもたちがより輝く時ほど、先生は見えない。見えない先生たちほど力のある先生たちだ】

飯田市のリンゴ並木が昭和28年に植樹され60年を迎えたという。このリンゴ並木の歴史には、飯田東中学校の生徒の皆さんが深くかかわっていることは、衆知のことである。

飯田東中学校2代目校長松島八郎先生が、札幌の街路樹の美しさを、ヨーロッパにあるというリンゴ並木とあわせて語った校長講話が、飯田大火を目の当たりにした生徒たちを感動させた。そして、生徒たちは粘り強く、逞しい活動を続け復興のシンボルとでも言うべきリンゴ並木を誕生させた。しかし、その裏には多くの教師の適切な指導・助言があったようである。この教師の営みを、現在飯田東中学校の田中清一先生はその論文の中で「伴走者」と表現している。まさに的を射た表現である。飯田のリンゴ並木を語る時、当時の中学生や後輩生徒たちの純粋な思いや行動がクローズアップされ、その裏で支えた教師は語られることがない。しかし、それでいい。ある先生は「教師は無名の戦士」と言い、田中先生は「伴走者」と言うが、教師とはそういうものなのだ。

さて、話をリンゴ並木誕生当時に戻そう。リンゴ並木づくりという教育活動は、ジョン・デューイの経験主義が強く反映されたとされる当時の学習指導要領、特に新設された特別教育活動の理念とでも言うべき「なすことによって学ぶ」の具現でもあった。そして、この活動は行政や市民をも巻き込んだ壮大なドラマとなった。まさに生徒と教師は「なす」(doing)ことによって確かに「学んだ」(learning)のである。

私たちの進めている共育クローバープランも、まず「なす」(doing)ことが大切であると、改めて思うのである。